

巻 頭 言

わが北星学園大学が札幌市内の南5条西17丁目に誕生したのは、1962(昭和37)年であった。以来20年、本学が今日あるを得ているのは、偏えに各界各方面の絶大な支援と変わらざる愛情に満ちた鞭撻の賜物であって、われわれ一同衷心より感謝おく能わざるところである。

もとより、この間常に順風に帆をあげて平穩無事な航海を続けてきたわけではない。むしろそれは、幾多の試練に遭遇し、無数の困難や危険に曝されつつも、その都度あらゆる努力を傾注してそれら一つひとつを乗り越えて今日に及んだ年月であった。これを人の一生になぞらえるならば、この世に生をうけたみどり子が、一個の責任ある社会人として社会的に認知される為に必要な最初の20年に匹敵するものと云えるであろう。

それにつけても、私はいま、ライン河畔の古都ケルンにそびえ立つあの大聖堂を想い起こす。その最初の礎石が据えられたのは13世紀中葉の1248年、そして工事のすべてが完了したのは19世紀も終わりに近い1880年のことであった。しかも、その間632年という長い年月の経過にもかかわらず、大聖堂は当初のプラン通りに完成したというのである。

「一日にして成らない」のはローマだけではない。ケルンの大聖堂もそうだし、それとは到底比較すべくもないのだが、本学20年の歴史も、短いなりに決して一日ではできなかつたのである。

さらに云うならば、単なる物理的時間の経過だけが歴史を造るのでもなければ、人間にとって最大の重要性をもつものでもない。われわれに即して云えば、この20年という時の流れの中に注ぎ込まれ、蓄積され、それなりに結実を見たその全プロセスが重要なのである。すなわち、設置者たる学校法人北星学園理事会の高邁なヴィジョン、歴代の学長始め学内各役職者およびすべての教員、ならびに事務局長とこれを支えた全職員の「大学」建設の情熱、4700名の卒業生と1700名の在学生の若い活力、そして多くの学外篤志家の熱い励し——これらすべての凝縮・結実

に費やされた20年であったがゆえに意味をもつこれまでの歩みなのである。

いまからおよそ1930年の昔、生まれて間もない初代キリスト教会の最大の指導者であったパウロは、当時物質的繁栄と享樂的生活に酔いしれていた港町コリントの信者たちに対して、「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。」と書き送った。歴史の全プロセスは神の手中にあり、人間の生はすべてそれへの部分的参加に過ぎない。ここに人間のわごの限界と同時に栄光がある。このような鋭敏な歴史認識の感覚と姿勢が「虚栄の市」コリントの人々には欠けていたことを、パウロは指摘したのであろう。

たしかに本学が全国93の国立、34の公立、324の私立、合計451の大小さまざまな大学の中の一つとして社会的に認知されるために、過ぎ来し20年は不可欠の歲月であった。

しかし、われわれは、本学にはそのような云わば「人」による認知に加えて、歴史の全プロセスを掌握する「神」の認知がなければならないと信ずる。本学が拠って立つ価値基準は、ここにある。この視点に立つゆえに、過去20年はまさしく神の恩恵の賜物(Gabe)であり、それゆえに、21年目以降の将来は神がわれわれに与えた重々しい課題(Aufgabe)になる、と云えよう。

以上、所感の一端を述べて、とくに開学20周年を記念する「北星論集19号」巻頭のことばとするしだいである。

1982(昭和57)年3月

北星学園大学

学長 赤城 泰